

令和5年度訪問型家庭教育支援推進事業 第2回専門講座

1. 日 時 令和5年10月18日(水) 13時30分から15時30分まで
2. 場 所 和歌山市東部コミュニティセンター
3. 参加者 参加者28名
4. 内 容

◆講 演

親の安全安心の土台となる「伴走者」をめざして

講 師

和歌山県子ども・女性・障害者相談センター所長

和歌山県訪問型家庭教育支援推進協議会委員

鈴木 玲 氏

◆事例検討会(グループ協議)

◆講 演

- 1) 福祉の現場に向き合う～ケースワーカーとしての日々～
児童虐待の背景(リスク要因)を捉える

親側…妊娠・出産・育児の負担感、攻撃性・衝動性、

親としての未熟性等

子側…発達におけるかかわりの難しさや育てにくさ等

環境…経済不安、家族間不和、ひとり親世帯、親族や社会からの孤立等

これら要因への支援が必要。しかし、虐待通告を受けて児童相談所が介入しても、親はかえって社会に対して疑心暗鬼となり、辛うじて繋がっていた者に対しても警戒し拒否感を強め、関係を遮断し、虐待のリスクをさらに高めてしまうケースもある。



対立関係でなく**保護者とのパートナーシップ**を築くことが重要



- 2) 福祉の現場で考える～スーパーバイザーとしての日々～

育児教育の必要性



問題が生じてから**事後的に**
親にアプローチ



育児ストレス等の虐待リスクが生じる前
に**育児スキルや正しい知識**をじっくりと
親に学んでもらうこと

親に寄り添う支援の必要性

子ども虐待死防止の万能薬とはならない

ポリヴェーガル理論 (Stephen.W.Porges)

哺乳類が持つ「**社会交流システム**」について、親がこれを抑制されていた場合、身に降りかかる出来事に対して防衛反応を示してしまう。「社会交流システム」を有効に機能させ、**親のストレス耐性の領域を広げる**ことが大切だが、回復させるためには…?

親に「安全感」を与える働きかけが必須

支援者のおだやかな声、あたたかい眼差し、やさしい表情

支援者は親との間に神経レベルでの信頼関係を構築する必要がある。相手に対する先入観を排除し、性善説に立ち、リスペクトの気持ちで、親の「安全安心の土台」となる「伴走者」になることが不可欠。

3) 福祉の現場から見つめ直す～所長としての日々～

ポイントは、問題が生じる前に支援者がいかに自然に親と繋がることができるかです。虐待死のリスクが高い乳幼児期においては、親自身が周りから「祝福されている感覚」を持ちやすいため、保健師や助産師等のポピュレーションアプローチがとても重要です。

フィンランドの「ネウボラ」のような切れ目のない伴走型の取組、福祉と教育が連携した「訪問型家庭教育支援」、「子供食堂」をはじめとした地域のコミュニティ活動の広がりを期待しています。



◆事例検討会（グループ協議）の様子



5. アンケート（回収25名）

①参加者内訳

家庭教育支援関係者	… 12名	福祉行政担当者	… 1名
園・学校関係者	… 1名	スクールカウンセラー	… 2名
スクールソーシャルワーカー	… 2名	訪問支援員	… 1名
不登校児童生徒支援員	… 4名		
その他（社会教育士、学童保育支援員）	… 2名		

②参加者の感想（一部抜粋）

◎講演

- ・ 具体例を含めたお話で大変分かりやすかったです。実際の虐待対応になると、現場では難しさを感じています。虐待に対する考え方の温度差が大きい現状がありますので、今日のようなお話を広く聞かせてもらうことがよいのではないかと思います。
- ・ ポリヴェーガル理論のところを初めて聞いたので勉強になりました。「安全感」を与えるために先入観排除は本当に大事だと私も思っています。非言語メッセージがオーラとなって伝わることもよく分かって、そのとおりだと思いました。早め早めにしんどさに気づくことの重要性をつくづく感じています。
- ・ 学校教育において、妊娠期の胎児への影響、子供の発達について教える必要がある社会になったのだなあ実感しました。完璧な子育てができる人はいないと思われれます。「子育てって難しいよね、大変だよ、でも楽しいよね。」「いつでも相談できる場所があるよ。こんな時はココへ、あんな時はアソコへ。」ということが周知されるようになればと思いました。
- ・ お父さん、お母さんの困り感や心に丁寧に寄り添っていくことで、子育ての仲間になれること。そして仲間として、本当に心からよいと思うことをすすめていく。仲間になりたいといつも思いながら接しています。
- ・ 川上での親支援の重要性で、大きな問題の未然防止につながるということが最も印象に残り、自分に何ができるか考えるきっかけをいただきました。親に訪問を断られたりしてスムーズな支援ができず、心が折れそうなこともあります。どの職種でも様々な葛藤を抱えながら根気強く子供、保護者と向き合う大切さを感じ、また頑張ろうと思いました。

◎事例検討会（グループ協議）

- ・ メンバーがそれぞれの立場で考えを発表していたので、新たな視点で考えることができました。
- ・ 4人のグループでしたが、Aさんの家族に対して真剣にどうしたらよいかを話し

合いました。Aさんに対しては、学校を中心にサポートしていく。母の負担を減らす方法とともに、この家庭の伴走者としてちょうどいいサポートをしていくとよいということになりました。事例検討会でしたが、本当の事のように熱くなって話せたのが楽しかったです。

- ・湯浅町、橋本市のきめ細かい行政の対応を伺うことができ、よい学習の場を提供いただきました。

◎福祉と教育の連携について

- ・連携については大いにその必要性を感じていますが、情報共有という点で危惧しています。守秘義務に関するガイドラインが必須であり、関係する全員の情報保守に対する認識が肝要と考えます。
- ・一人のケース、一つの家族を共に支援することから連携ができていくのかなと思います。スクールソーシャルワーカーの活動がつかないでくれています。
- ・“連携”はもう言葉としては浸透しているのではないのでしょうか。しかしながら現場ではなかなか…の現状を感じています。その乖離をどううめていくか…日々頭を悩ませています。